

第6部 百済王家の衰退とその背景

——百済王家と藤原南家・北家——

1. 昆支王の末裔

昆支王については第2部で紹介しましたが、百済王家衰退というテーマと関係がありますので、もう一度述べておきたいと思います。

(1) 昆支王

① 昆支王の渡来

百済の蓋鹵王は高句麗の侵略に備えて倭との同盟を図り、倭王雄略に対して池津媛を人質として送りますが、雄略は池津媛に無礼があったとして焼き殺してしまいます。これを聞いた蓋鹵王は「もう女性は送らない」と言って、弟の昆支王に「お前が倭に赴いて倭王に仕えよ」と命じます。昆支王は「命令には背けません。願わくば君の婦を賜って、それから私を遣わして下さい」と願いました。蓋鹵王は孕んだ女を昆支王に与え、「もし途中で出産したら母子と一緒に帰らすように」と言い付けました。案の定、女は唐津の沖の加唐島で男子を出産します。これが後の武寧王で、島で生まれたというので「嶋王」と呼ばれました。

昆支王は5人の子どもと共に渡来して河内の飛鳥（安宿郡）に定住します。百済では蓋鹵王が高句麗により漢城を攻められて殺害され、王子の文周王が熊津に遷都して王位を継承します。そして長子三斤を太子とし、倭国に来ていた昆支王を内臣佐平に任じて帰国させますが、昆支王は帰国すると間もなく死去してしまいます。そこで権力を握った貴族の解仇が文周王を暗殺し、文周の長子三斤を立てて王とします。解仇は他の貴族たちによって粛清されますが、13歳という若さで即位した三斤は3年後に急死します。後継者選びについて相談を受けた雄略は、倭国に滞在していた昆支王の5人の子の中から第2子の末多王を推薦しました。幼少ながら聡明であった末多王に、筑紫の軍兵500人を護衛として付けて百済に帰国させ王位に就けました。これが東城王です。東城王が百済の第24代王として即位したのは479年のことでした。

昆支王の他の子どもと一族は、そのまま河内の飛鳥に定着しました。

② 飛鳥戸奈戸麻呂

河内の飛鳥は葛城山西麓の羽曳野市・富田林市・太子町・河南町辺りで、難波と飛鳥や奈良を結ぶ要路上にあり古代では重要な地点でした。安宿郡といっていますが、これは昆支王の一族が定住してから付けられた名称でしょう。聖武天皇の妃となった光明子は安宿媛と呼ばれていましたが、それはこの地で養育されたからではないでしょうか。この地は蘇我氏も勢力を持っていました。蘇我石川麻呂はこの安宿郡を流れる石川と縁がある名と見てよいでしょう。安宿媛の父は藤原不比等ですが、その不比等の子武智麻呂・房前・宇合3兄弟の母は蘇我娼子という蘇我氏の女です。このような関係で不比等は、光明子を安宿郡の蘇我氏に預けたのでしょうか。そうした事情から、昆支王の子孫たちと藤原家とが近い関係にあったこ



とは十分考えられることです。

昆支王の子孫たちは、飛鳥戸（部）氏を名乗りますが、いつからそうなったのかはよく分かりません。飛鳥戸氏が歴史上登場するのは、天平神護元年（765）に正六位上百済安宿公奈止麻呂が外従五位下を授けられたという続日本紀の記事です。前年に淳仁天皇を廃して再び皇位に着いた高野天皇（称徳）は、正月7日に年号を天平神護と改め、危急な時に身命を惜しまず、正しく明るく清らかな心を持って朝廷を護り仕え申し上げた人こそ地位を上げるべきであるとして、多くの人を昇進させました。その中にこの奈止麻呂が含まれているのです。称徳に仕えて誠実であったことは確かなようです。ここに百済安宿公とありますが、飛鳥戸氏は安宿公・百済安宿公・飛鳥戸造・安宿造など、いろいろと呼ばれています。奈止麻呂の名前も奈杼麻呂・奈止丸などいろいろと書かれています。奈止麻呂は最後は正五位上まで上りましたが、官人として決して高位に登り詰めたとは言えないでしょう。しかし、娘の永継は藤原北家と関わりを持つことによって歴史上に名をとどめました。

（2）安宿部永継

① 永継の後宮入り

奈止麻呂の女永継は、はじめ藤原内麻呂の妻となり真夏・冬嗣兄弟を生みます。後に桓武天皇の後宮に入って女嬬となります。そしてそこでも一人の男の子を産みますが、親王と認められず臣籍降下させられます。しかしその子は成長して良岑安世となり、立派な業績を残しています。永継自身も皇子を儲けたにも関わらず、従七位下という低い官位で留め置かれました。

後宮に入った百済王家の女性たちはすべて従五位下以上の官位を授けられていますから、待遇の違いが分かります。明信の配慮が大きかったと思われそうですが、桓武はどのような意識を持っておられたのでしょうか。飛鳥戸造氏が百済と何か関わりがあるだろうことは恐らく感じていたのでしょうか、そのような氏族はたくさんありました。百済から渡来した氏族の子孫たちが枝分かれしていろいろな姓を名乗っていますので、桓武は大して気にも留めなかったのでしょうか。飛鳥戸造氏も積極的にアピールした気配がありません。しかし、永継が後宮に入った経緯はどうだったのでしょうか。飛鳥戸造氏が百済昆支王の末裔であることを知っていた藤原内麻呂が、百済王氏は外戚であると宣言した桓武に対して、別の百済王関係の女がいますよと妻の永継を紹介し、後宮入りとなったのではないのでしょうか。当時は妻を帝に捧げることはごく当然のように行われました。

桓武が皇子を生んだ永継に対して、内麻呂に対する配慮もあって、従五位下以上の官位を与えようとしたことは想像に難くありませんが、これに抵抗したのが尚侍（尚典か）明信ではなかったのでしょうか。

明信には、百済王に関係する氏族は百済王氏のみであるというプライドが、恐らく人一倍強かったでしょうし、善光以来日本の天皇に貢献してきたという自負もあったでしょう。天皇の外戚であり、天皇から貰った百済王という姓を名乗っている一族と、たとえ百済王につながる血を持っているとしても長い時代の推移の中ですっかり薄められてしまい、百済王族としての矜持を失ってしまった氏族とを同列に扱われることは、明信にとって我慢のならないことだったでしょう。明信はそのことを桓武に告げて、桓武の理解を得たのではなかったのでしょうか。

しかしこの明信のプライドが、後に百済王家が藤原北家から冷たくあしらわれる結果を招いたような気がするのです。

② 良岑安世

飛鳥戸造永継は内麻呂のもとに真夏・冬嗣を生んで、奇しくも藤原北家台頭の基礎作りに大きな貢献をしたことになりませんが、永継と桓武の間に生まれた良岑安世も正三位大納言に昇進した逸材でした。3人の子が揃って政界において大活躍したのは、内麻呂のバックアップもあったでしょう

が、永継の潜在的な力の賜物と言えるかも知れません。

安世は延暦4年(785)年に生まれました。785年というのは長岡遷都の翌年で、桓武が交野の柏原で郊祀壇を築いて天帝を祀った年です。百済王明信はこの時尚典でした。永継は長岡京で初めて後宮に入ったのでしょうか。安世は延暦21年(802)に臣籍降下して良岑朝臣の氏姓を与えられます。武官としての職務を歴任し、陸奥出羽按察使・春宮大夫・右近衛大将などに任じられ、天長5年(828)に大納言となっています。「日本後紀」の編纂に関わり、「経国集」の編纂を主宰し、漢詩に秀で、真言宗の開祖空海との親交を深めるなど文化面での活躍も大いなるものがありました。陸奥出羽按察使を長く務めていますが、蝦夷への警戒だけでなく渤海国への対応が大きな目的だったかも知れません。百済王敬福に続いて百済王家から相次いで出羽守に就任していますが、それも桓武の在任中のことであり、9世紀に入ると姿を消してしまいます。

安世が文化面でも大いに活躍したのに対して、百済王家は武官として大きな活躍をしましたが、文化面での事績が全く見られません。これは百済王にとって大きなマイナス面だったのではないのでしょうか。それが百済王家衰退の一つの要因ではなかったかと考えられるのです。

2. 北家の台頭

藤原三家の中で北家が台頭した背景には、桓武が百済王家に対して「百済王は朕が外戚である」と述べた言葉を、自らに置き換えて実践した良房の強引な策略がありました。良房は権謀術策によって天皇の外戚である地位を築き上げたのです。しかしその基礎を作ったのは良房の祖父内麻呂であり父冬嗣でした。

(1) 藤原内麻呂

① 徳政論争

内麻呂は延暦6年(787)に従四位下に叙せられると以後武官や地方官を歴任し、延暦13年(794)平安京へ遷都の直後には参議に昇進します。延暦17年(798)には従三位中納言となり、翌799年には造宮大夫に任ぜられて遷都後の造宮の最高責任者になります。重要な政務に種々携わりながら過失を犯したことがなく、人々からその才覚を高く評価されたと言います。温厚篤実で有能な内麻呂を桓武が買っていたことは、延暦24年(805)の桓武崩御の前年に行われた「徳政論争」において、内麻呂が桓武の殿上に侍していたことによっても窺えます。

桓武は参議右衛士督の藤原緒嗣と参議左大弁の菅野真道を宮中に招いて「天下の徳政」について論じさせました。二人は太政官執政部から選ばれて、徳政という観点からの政策を述べる機会を与えられたのでした。緒嗣は「今天下が苦しんでいるのは軍事と造作であって、この両方を止めれば百姓は安らかになる」と主張しました。これに対して真道は強く異議を唱えました。桓武の一生は蝦夷討伐戦争と都造宮に明け暮れたと言われますが、徳政論争を桓武が言い出したのには、体力を失って病気がちになった桓武の反省があったことは間違いないところでしょう。造宮大夫であった内麻呂とは既に意思疎通がなされていたのでしょうか。桓武は緒嗣の意見を直ちに採用して、計画中の第4次蝦夷討伐を中止し、平安宮の造宮を打ち切ることを決定します。徳政論争は、桓武が死を予感して試みた政策転換のための演出でした。天皇の側に仕えてこの重要な論争を取り仕切った内麻呂は、桓武から官位を超越した信任を得ていたこととなります。

② 真夏と冬嗣

内麻呂と飛鳥戸造永継との間に生まれて真夏と冬嗣の二人は、内麻呂の人間性と才覚を受け継ぎました。歴史的には次男冬嗣の事績が評価されていますが、その陰には真夏の平城天皇に尽くした業績がありました。

806年に桓武が崩御して安殿親王が即位し平城天皇が誕生すると、桓武の遺言によって賀美能親王が皇太弟となり、冬嗣は従五位下春宮大進となります。桓武が弟早良皇太子を死に追いやって皇太子としたのが安殿親王でしたが、桓武が早良親王の怨霊に悩まされたと同様に、安殿もまた心身症に悩まされ続けました。そうした安殿が妃の母である藤原薬子との醜聞を招き、これに立腹した桓武との間や、桓武の意向を受けて安殿の説得に当たったであろう百濟王明信との関係も大きく悪化しました。即位した平城は官司の合理化などの策を打ち出して政治の立て直しを行います、桓武が遠ざけた薬子を呼び戻して尚侍とし、明信は退けられてしまいます。

このような動きの中で、賢く立ち回ったのが内麻呂でした。やがて来る安殿と賀美能との対立を予測して、長男の真夏を安殿に近付け次男の冬嗣を賀美能に近付けます。どちらが皇位をしっかりと継承するか分からない段階で、二人をそれぞれに結び付けたのでした。結果として賀美能に結び付けられた冬嗣が内麻呂の後継者としての地位を確立するのですが、真夏は安殿に尽くすことによって高い地位を与えられます。安殿が即位すると真夏は従五位下から一挙に従四位下に昇進しています。嵯峨天皇の代になると正四位下参議に叙任されますが、後に述べます薬子の変に連座して参議を解かれて伊豆権守に左遷されます。しかし2年後には本官に復帰し、平城上皇の最晩年までその近臣として上皇と朝廷との間のパイプ役を担い続けました。弟冬嗣に嫡流は譲らざるを得なかったものの、子孫には日野家を初め多くの名家を輩出しています。



藤原冬嗣

嵯峨天皇の側近となった冬嗣はその信頼が厚く、大同5年(810)に嵯峨が天皇の秘書機関である藏人所を設けると初代の藏人頭となりました。藏人所は天皇直属の機関として太政官・八省の官司的組織の外に置かれ、藏人所の官人は天皇に近侍して機密の記録を保管し、常に天皇と高官たちとの間にあって政務の調整を行いました。藏人頭の責任と役割は極めて重く、冬嗣がこの地位に就いたことによって、北家の勢力拡張の基礎が固まったと言ってもよいでしょう。冬嗣はその後も異例の昇進を続けて弘仁9年(819)には大納言となり、最後は825年に左大臣に登り詰めました。

これらのことは真夏・冬嗣の才能が優れていた結果ではありますが、内麻呂の先を見通す才覚があったからであることは言うまでもありません。残念ながら南家はこのような人材に恵まれませんでした。南家と深く結びついていた百濟王家は、南家と運命を共にすることとなります。

(2) 平城天皇の時代

806年、桓武の崩御を受けて即位した安殿皇太子は平城天皇となります。3年後には病気を理由に嵯峨に譲位して上皇となりますが、天皇を辞した平城は元気を取り戻し政治に介入します。

① 伊予親王の変

平城が即位した翌年の大同2年(807)、藤原宗成が伊予親王に謀反を勧めているという情報を掴んだ藤原雄友は、これを右大臣内麻呂に告げました。伊予親王は桓武と藤原南家は公の女吉子の間に生まれ桓武の寵愛を受け育ちました。雄友は吉子の兄で大納言を務めており、台閣では内麻呂に次ぐ地位にありましたから、親王は大へん恵まれた環境にあったと言えるでしょう。

その親王に謀反の嫌疑が掛けられたのでした。それを聞いた親王は、平城に対して宗成が謀反を勧めた経緯を説明し、自らの弁明を行いました。そこで朝廷が宗成を捕らえて尋問したところ、首

謀者は伊予親王であると主張しました。これに激怒した平城は、兵を送って親王の邸宅を包囲し、伊予と母吉子を逮捕し、二人の身柄を大和国の川原寺に幽閉しました。二人は間もなく毒をあおいで自害します。大納言雄友も連座して官位を剥奪され伊予国へ流されました。また、当時ナンバー3の地位にあった藤原乙叡も中納言の官位を解かれてしまいます。藤原南家の中枢にあった継縄と百済王明信の間に生まれた乙叡はこれによって失脚したのです。乙叡は酒宴の席で安殿に対する無礼があったことも、平城から失脚させられた原因であると言われます。右大臣の内麻呂が雄友から最初に相談を受けながら、この事件収拾のためには全く何の処置も講じませんでした。北家は南家の危機に際して何の協力もしなかったのです。北家と南家は同じ藤原であっても、もう全く別の氏族となってしまっていました。それに、内麻呂には永継を差別的に扱った尚侍百済王明信への敵意が強かったということもあるでしょう。

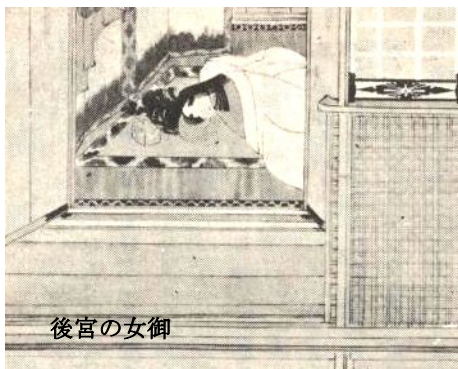
② 南家の没落

この事件は唐突に起こりました。事件の首謀者である宗成がどういう立場であったのか不明ですが、桓武には親王が複数いて、それぞれを擁立する藤原氏族の間で陰湿な争いが行われていたであろうことは想像に難くありません。桓武は遺言で安殿を後継者と決め、それに賀美能を皇太弟としていました。他にも伊予親王・大伴親王の二人がいて争いが起こるであろうことを桓武が予見していたのでしょう。そして伊予抹殺計画の実行されたのがこの事件だったようです。安殿・賀美能と大伴は式家、伊予は南家の女を母としていますが、北家はこの時期に天皇の皇后や妃を持たず、後継者争いの渦中からは離れたところにいることが出来ました。勝手な想像ながら、内麻呂はこの間の推移を冷静に見極めて、同じ藤原家であっても争いの起こることを予見し、将来対立勢力となる南家や式家の没落を容認し、その第1段階がこの伊予親王事件だったのではないのでしょうか。

乙叡は赦されて罪が無かったことを知りますが、大同8年(808)に48歳で死去します。雄友は嵯峨朝の弘仁元年(810)に罪を赦されて正三位に復されて宮内卿にも任ぜられますが、間もなく811年に薨じてしまいます。こうして南家を支えた二人が罪を回復したのち、勢力を挽回することもなく相次いで薨じ、南家は没落していったのです。

③ 薬子の変

薬子は桓武から信頼を寄せられた藤原種継の女です。種継は造長岡京使に任じられて長岡京建設に邁進していた頃、大伴氏などによって暗殺されます。その事件に弟の皇太子早良親王が関わったとして、桓武は親王を死に追いやりました。そして長男の安殿親王が皇太子となったのですが、桓武は早良の怨霊に悩まされ続けました。そうした事件を背景に持つ種継の女の薬子と安殿が、薬子の娘が安殿のもとに入ったのを機会に不義の仲となってしまったのです。娘を連れて安殿の許を訪ねた薬子の妖艶な姿に目の眩んだ安殿は、薬子を春宮御所に入れました。いまわしい事件を背景に持った二人の関係は、桓武の神経を逆撫でするものだったでしょう。桓武は薬子を春宮御所から遠ざけます。尚侍の立場から明信が実際に活躍したようです。



後宮の女御

安殿が即位すると直ちに薬子を呼び出し尚侍に登用します。薬子は平城にとって皇后のような存在となり、平城にはその後も皇后も妃も存在しないということになりました。薬子には兄の仲成がいますが、仲成は薬子を利用して平城との関係を深めることを企みました。伊予親王事件の後には平城と仲成・薬子との結び付きは一段と深まったようです。

平城は809年4月に賀美能への譲位を公表します。桓武と同じく怨霊に悩まされていた平城はその年の初めから病気となり、政務に耐えられないというのがその理由でした。

賀美能は即位して嵯峨天皇となりますが、上皇となった平城に対して大へんな気の遣いようでした。上皇のために新宮の建設を企画し、上皇の希望を入れて旧平城宮をそれに当て、仲成を造平城宮使の長官に任命しています。上皇は新宮の完成を待たずに急ぎ平城京へと移っていきます。天皇の地位から自由になった平城の病気は回復に向かいました。それと同時に政権への意欲を取り戻した平城は、反嵯峨朝の策動を始めます。この状況を「二所朝廷」と言っていますが、相反する勅令が出たりして政治上の混乱が生じました。809年9月に平城は上皇の立場で、平安京を廃して都を平城の旧地に移すことを命令します。嵯峨との協議や連絡は一切無く突如の遷都宣言でした。嵯峨はこれに対して拒絶の姿勢を貫き、戦闘に備えて兵力を徴発し宮中の警備を固めます。810年に入っては藏人所を設置し上皇の動きを監視しました。そして薬子の官位を奪い仲成を捕らえて監禁します。

このことを知った平城は激怒し、ついに自ら東国に赴いて軍兵を結集して嵯峨朝廷に反撃を加えようとした。そして薬子と共に平城宮を発進します。しかし上皇らが大和国添上郡越田村に来たとき朝廷の兵士に遮られ、やむなく平城宮に引き返しました。上皇は頭を丸めて出家し、薬子は自殺しました。この間に監禁されていた仲成は射殺されています。上皇側についた貴族高官は嵯峨の寛大な計らいにより厳刑を免れますが多くは左遷されます。その中には内麻呂の長男参議の真夏も含まれていました。嵯峨により皇太子に立てられていた平城の皇子高岳親王はその地位を奪われ、嵯峨の異母弟の大伴親王が皇太子となりました。後の淳和天皇です。

3. 天皇と藤原北家

(1) 天皇の外戚

① 嵯峨天皇

嵯峨は平城上皇との問題が解決すると、桓武が中止した蝦夷への第4次討伐を計画します。坂上田村麻呂の後継者文室綿麻呂が陸奥出羽按察使として陸奥国の政策を担っていましたが、810年政府は陸奥国の蝦夷の地であったところに和我・稗縫・斯波の3郡を置いて律令制下に組み入れました。綿麻呂の最大の任務は更に北方にある蝦夷の地の討伐でした。征夷大將軍に任じられた綿麻呂は、陸奥・出羽の1万の軍勢をもって爾薩体(ニサテ)方面に進撃して北上川流域とその東部一帯を制圧し、朝廷の支配領域を拡大しました。

嵯峨はおだやかで落ち着いた性格を持ち、蝦夷征伐を実行したものの武人というよりは文化人的な傾向の強い帝王でした。桓武に習って親政を崩しませんでした。政治を公卿に委ねるという方針を採りました。823年4月になると嵯峨は離宮の冷然院に移り、右大臣藤原冬嗣に退位する旨を伝えます。そして皇太弟の大伴親王に譲位し淳和天皇が誕生します。

嵯峨には桓武と同じく後宮に多くの女人を抱えていました。百濟王家からも女御貴命と尚侍慶命が上っており、貴命は忠良親王・基良親王・基子内親王を生み、慶命は源定・源鎮・源善姫・源若姫を生んでいます。嵯峨の親王や内親王もまた数多く、身分の高くない女から生まれた親王・内親王の多くは臣籍降下させられて源姓を名乗りました。これが嵯峨源氏ですが、臣籍降下させられた中にも仁明朝になると台閣の重鎮として活躍する者が輩出しました。慶命の生んだ源定は20歳という最年少の若さで参議に叙せられています。藤原冬嗣の子良房も同じ時期に参議となりますが年



齢は31歳になっていました。

② 文人嗟峨

桓武の遷都の理由の一つとして僧侶の政治介入の排除があったことは前に述べましたが、それは僧侶の勢力を恐れたからではなく、寺院に蔓延した遊情の気風と国政に介入して経済的利益を追求する傾向を打破し、僧侶が国家に奉仕することを求めたものでした。桓武は寺院の経済活動を厳しく圧迫します。許可無く氏寺の建設を禁止したのも、寺の経営を通して氏族が経済的の利得を得ようとしたのを差し止めたものでした。桓武は寺院建立という美名のもとに貴族や豪族たちが土地を取得し、経済活動を盛んにして勢力を拡大し、結果として律令国家の基盤である公地・公民制が内部崩壊する危険を防ぐ意図があったのです。

一方、仏教への理解もあった桓武は804年の遣唐使の一行に最澄と空海の二人を加えました。これは仏教に新しい風を吹き込んだだけでなく、以後の朝廷の唐風化に大きな影響を与えました。これまで半島経由で半島化して入っていた中国の文化が直接わが国に入ることになりました。これは朝鮮半島をこれまでのように尊重する姿勢から離れる結果を生み、百済王一族の相対的な地位低下につながったと見る事が出来るでしょう。



賀茂祭

嗟峨もまた桓武の政策を受け継ぎました。平安京に当初から建てられた東寺を嗟峨は823年に空海に与えました。空海の活動はこの東寺を中心

にして展開されますが、先に最澄が比叡山で開いた天台宗と共に、空海の密教真言宗もまた鎮護国家てきな役割を果たしたのでした。淳和は830年に奈良の諸宗と天台・真言に対して、その宗義を述べさせました。その時空海が論述したのが「秘密曼陀羅十住心論」で、真言密教の優越性が包括的に述べられたのでした。

嗟峨は仏教と共に、古来の神社祭礼についてもその興隆を図りました。京都で最も古くて有名なのが賀茂祭ですが、これは平安遷都以前から有ったものです。7世紀末には既に秦氏らによって行われていたと言います。賀茂は元来葛城にいた氏族で、仁恭宮のあった木津川のほとりの賀茂に移り、最終的に葛野に移り住んで氏神の賀茂神社を開きました。葛野は秦氏とも深い関係にありました。この賀茂神社の祭が勅祭として官営の祭になったのが嗟峨の時代です。嗟峨は伊勢神宮の斎宮にならって賀茂神社に斎院を設けます。斎宮と同じく斎院もまた未婚の内親王が宮中で1年間の潔斎をした後、洛西嗟峨野なる野々宮に入って1, 2年の潔斎を行い、そして賀茂神社に入り祭礼に奉仕します。初代の斎院になったのが嗟峨の皇女有智子内親王でした。その墓が嗟峨野落柿舎の隣りにあります。嗟峨はこうして賀茂祭を官営の祭とし、4月の中の午の日（現在は5月15日）に行うことにしました。葵祭という名前で親しまれていますが、源氏物語第9帖「葵」の中に賀茂祭での出来事があります。紫式部は青葉の時期に咲く葵を取って光源氏の正室葵を創り出し、帖の名



有智子内親王の墓

前としたのでしょう。ここから葵祭という名が付けられたように思われますが、徳川時代以前にはこの名が見られません。恐らく徳川時代になってからその家紋に因んで付けられた名称のようです。

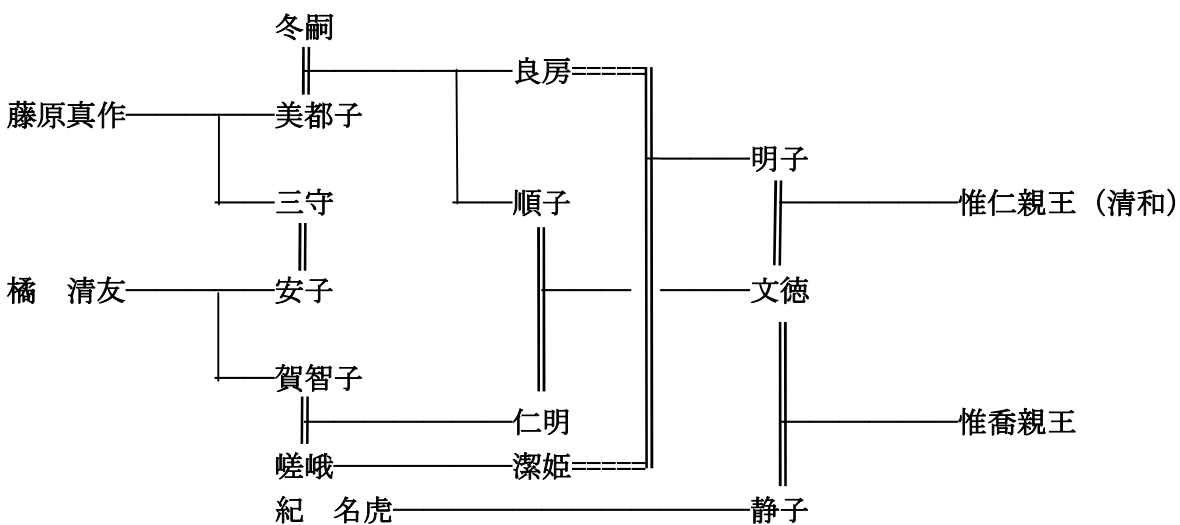
桓武や仁明の親王・内親王もまた、政治よりも文化に親しむ傾向が強かったようです。源氏となった皇族たちも例外ではなく、台閣の中に藤原氏と源氏とが程良く登用されていますが、源氏は概ね文人的で役職に意欲を持たず、藤原氏の独裁に拍車を掛けました。

③ 皇后橘賀智子

嗟峨の皇后となった橘賀智子は「風容絶異にして、手は膝を過ぎ、髪は地に委す」と言われた美女だったようです。賀智子は橘清友の女で、清友は橘諸兄の孫で奈良麻呂の子に当たりますから歴とした血筋の女性です。賀智子の母は田口益人の娘です。奈良麻呂は孝謙天皇の時、藤原仲麻呂の専制や農民の疲弊を理由に事件を起こした首謀者として処刑されるのですが、死刑となったのか流罪となったのか記録がないので分かりません。清友を連れて落ち延び田口氏に匿われたのでしょうか。或いは死罪となったので益人がその子清友を引き取ったのでしょうか。実はこの時、百済王敬福が孝謙の命を受けて奈良麻呂らの捕縛尋問に当たっているのです。同じ交野を本拠とした田口氏に対して清友の受入を敬福が要請したとも考えられます。そこで清友と益人の娘とが結ばれました。田口氏は交野(現在の枚方市田口)を本拠とする氏族ですから、賀智子は枚方に縁の深い皇后です。そしてまた、賀智子を仁明の後宮に入れたのは百済王明信だったのではないのでしょうか。十分に有り得ることだと思えます。



賀智子は皇太子賀美能が即位した809年に正良親王(仁明)を生んでいますが、この時に夫人となり、更に815年に皇后となりました。これには藤原冬嗣の大きなバックアップがありました。橘家と冬嗣は下の系図のように親戚関係の繋がりを持っていたのです。そうしてみると、賀智子もまた北家の関係者と言うことが出来るのです。賀智子は天竜寺のある場所に檀林寺を建立しましたので、檀林皇后と呼ばれました。この時の尚侍は百済王慶命でしたから、皇后と尚侍はいろいろな点で連携を図ったのではなかったのでしょうか。慶命の子源定の早い昇進にもこのような推測が出来るのです。



実は、藤原氏と橘氏とは元々関係が深いのです。藤原氏の基礎を築いた不比等は橘三千代と結婚して聖武天皇の皇后である光明子を産んでいます。光明子は藤原三家の祖である武智麻呂・房前・宇合の異母妹に当たるわけです。橘三千代は不比等と結ばれる前に美努王と結婚していてその間に

橘諸兄が生まれています。賀智子は諸兄の孫に当たりますから、冬嗣が賀智子を皇后に押ししたのは、このような先祖の縁を感じていたこともあるのではないのでしょうか。

(2) 淳和から仁明へ

① 承和の変

淳和天皇は、文人であった嵯峨と同様漢学に富み嵯峨とはすべてにおいて協調できたようです。嵯峨の意向で即位できたとの心情もあって嵯峨には頭が上がりませんでした。嵯峨の政治を踏襲して治世10年の後、皇太子正良親王に皇位を譲ります。これが仁明天皇で、仁明は即位すると淳和の子の恒貞親王を皇太子に立てました。恒貞の母は正子内親王で、嵯峨と賀智子の子であり仁明とは兄妹の関係にあります。賀智子にとって恒貞は可愛い孫でありました。

淳和は恒貞の即位を見ることなく承和7年(840)に崩御し、また嵯峨もその2年後の承和9年に病没します。この時、仁明には藤原冬嗣の女順子との間に長子道康親王がおり、嵯峨から信任の厚かった良房は順子の兄でした。道康は良房の甥に当たることとなります。実力者良房の庇護のもとにあった道康は、皇太子恒貞の春宮にとっては心穏やかならぬライバルでした。何らかの策動や道康親王やその周辺に対する誹謗があったとしても不思議ではありませんでした。嵯峨が没すると二日後に仁明の政府は突如兵力をもって皇居とその周辺を戒厳すると共に、春宮に勤仕する帯刀舎人伴健岑と橘逸勢らを逮捕しました。健岑らについての何らかの情報を掴んだ平城の皇子阿保親王が賀智子に知らせ、賀智子はこれを中納言良房に相談しました。良房は好機到来とばかりにこれを事件に仕上げます。

仁明は詔を発して伴健岑・橘逸勢を謀反人とし、その責を恒貞親王に帰して皇太子の地位を奪ってしまいます。健岑は隠岐国に流され、逸勢は伊豆国に流されましたが途中で死亡しました。それから数日後には良房は大納言に昇進します。そして、仁明の長子道康親王が皇太子に立てられました。道康の母は俊房の妹順子です。皇太子を廃された恒貞親王の母正子内親王は仁明の妹であり、賀智子は孫に当たる恒貞を可愛がっていましたから、正子内親王からは大いに恨まれたようです。

良房にとって道康を皇太子に立てたことは、皇室の外戚としての第1歩でした。良房はその目的達成のために、伴(大伴氏)・橘の名門氏族に手痛い負い目を負わせると共に、自らの係累以外の藤原氏を排除する手段をも講じました。即ち同族の高官であった叔父の大納言藤原愛発(チカナリ)、中納言藤原吉野を事件に関わったとして失脚させます。そして、天皇の血を受け継いでいる源氏を台閣に取り込むことによって他の氏族の進出を阻みます。このようにして身边にある権力者を巧みに追い落としながら、天皇家への接近を図ったのでした。

良房の源氏への接近は百済王家の女性にも影響がありました。嵯峨が寵愛した女御の貴命の子女は親王として残りましたが、親王・内親王は若くして没しています。同じく女御で尚侍となった慶命の子は臣籍降下して源氏となりました。源定は若くして参議となっています。豊俊の女は仁明によって源多・源光を生みました。豊俊の女は正史にその名前が登場しません。名前をわざと伏せたのでしょうか。源多や源光の地位や活躍に比べて、その母の身分が低いと考えられたのかも知れません。また源姓を賜った時点で母の出自が関係のないものと見なされたことも考えられます。いろ



藤原良房

いろな出自を持つ女御らの親王方がすべて同じ源氏となっていて、その母の名前が分からないのがたくさんあります。母親が不肖というの也有るのです。

嵯峨源氏となった親王・内親王を見ますと次のようになっています。嵯峨においても、その母の名前の分からないのが10件に及んでいます。

- ・女御 百済王慶命 百済王教俊の女
 - ・源善姫（814～？）
 - ・源鎮（824～881）
- ・源定（816～863）
- ・源若姫（？）
- ・更衣 飯高宅刀自 飯高岳足の女
 - ・源常（812～854）
- ・源明（814～853）
- ・更衣 山田近子
 - ・源啓（829～869）
- ・源密姫
- ・宮人 広井氏 広井弟名の女
 - ・源信（810～868）
- ・宮人 布勢武蔵子
 - ・源貞姫（810～880）
- ・源端姫（？～876）
- ・宮人 上毛野氏
 - ・源弘（812～863）
- ・宮人 安倍氏 安倍楊津の女
 - ・源寛（813～876）
- ・宮人 笠継子 笠縫または笠仲守の女
 - ・源生（821～872）
- ・宮人 粟田氏
 - ・源安（822～853）
- ・宮人 大原全子 大原真室の女
 - ・源融（823～895）
- ・宮人 紀氏
 - ・源更姫
- ・宮人 内藏影子 内藏高守の女
 - ・源神姫
 - ・源容姫
- ・源吾姫
- ・宮人 甘南備氏
 - ・源声姫
- ・宮人 田中氏
 - ・源澄（？）
- ・宮人 惟良氏
 - ・源勝（？～886）
- ・宮人 長岡氏
 - ・源賢
- ・女孀 当麻氏 当麻治田麻呂の女
 - ・源潔子（809～856）——藤原良房室
 - ・源善姫（812～882）——尚侍
- ・生母不明
 - ・源継
 - ・源年姫（？～874）
 - ・源良姫（？～884）

後掲の三松みよ子氏の論文「百済王氏凋落についての考察」では、名前が分からず某氏の「女」としていることを百済王家排斥の一つの理由として記述されていますが、以上のような状態を見ますと、当時の自然の流れとして受け止めたいと思います。

② 貴公子良房

承和の変において巧妙な画策を成功させた良房の母美都子は、藤原三守の姉であり嵯峨朝において尚侍として天皇の厚い信任を受けていました。三守の妻安子は皇后賀智子の姉であって、良房は賀智子と深く結びついていました。これが承和の変を成功させた大きな理由でもありました。嵯峨は、良房の風采や立ち居振る舞いが貴公子として抜群であるのを見極めて、当麻氏の女が生んだ皇女潔姫を良房の妻とします。潔姫は臣籍降下して源姓になっていたとしても、天皇の皇女が臣下の者に嫁ぐというのは異例のことでした。良房と潔姫の間に明子が生まれます。

良房は淳和朝で藏人になりますが、次いで春宮亮になって皇太子時代の仁明と密接な関係を築くと、833年の仁明即位に当たって藏人頭に抜擢されます。そして間もなく参議となり、その翌年には前任参議7人を越えて一躍権中納言の地位に就きます。時の台閣のトップは左大臣の藤原緒嗣で、式家の中心人物でした。良房は焦らずに周到的な栄進を図っていきます。中納言、大納言と昇進していった良房は、陸奥出羽按察使をはじめ右近衛大将



や民部卿を兼任します。朝廷として当面する東北の蝦夷対策や政策の安定を図る要職を一手に引き受けたのです。こうして彼の意向を無視しては政治が動かないという体制を作り上げたのでした。

名目上は台閣のトップでなくても、実質的な支配権を握った良房は、妹順子が仁明の女御となり第一皇子の道康親王が生まれると、皇太子恒貞を追いやって道康を皇太子に付けました。皇太子道康は紀名虎の女静子を娶り惟喬をはじめ3人の子をもうけました。仁明の末年になると良房はわが娘の明子を春宮に入れました。明子は嵯峨の外孫にも当たり血統としては静子の比ではないこととなります。その明子が皇太子の第4皇子を生みました。こうして良房は、妻潔姫によって嵯峨天皇とつながり、妹順子によって仁明天皇とつながり、娘明子によって道康親王（後の文徳天皇）とつながるといふ天皇家との深い関係の中で、次代の皇太子選任問題に取り組むこととなります。

嘉祥3年（850）3月、病気が重くなり政務に耐えられなくなった仁明は、出家した後41歳の若さで崩御します。皇太子道康が即位して文徳天皇が誕生しました。その年の11月、文徳は明子の生んだわずか9ヶ月の幼児惟仁親王を皇太子に立てました。文徳は静子の生んだ第1皇子の惟喬親王を皇太子にたてることを望んでいました。これを知っていた良房は、仁明の母である嵯峨の皇后賀智子が5月に没して文徳に相談すべき後ろ盾が無くなると、24歳の若い文徳を説き伏せて惟仁を立太子させたのでした。

良房が太政大臣となり台閣の長に登り詰めてから1年半後の天安2年（858）、文徳は急病に襲われて数日後に亡くなります。32歳の若さでした。そして皇太子惟仁親王が即位し皇位に就きました。これが9歳という少年の清和天皇です。この幼帝には到底これまでの天皇のような親政は望むべくもなく、立太子の時から起こっていた不評が渦を巻く状態でした。良房はそれに対して却って身内での保護を強めて政治上の専制を強化していきます。そしてこの幼帝に対して姪の高子を

めあわせませす。高子は良房の兄長良の娘で清和よりも9歳年長です。良房は清和の母となった明子以外に娘を持たず、姪高子は天皇家への他氏族の介入を許さない切り札でした。更に男子の跡継ぎも持たなかった良房は、高子の兄基経を養子にして自らの意に添う後継者に仕上げます。清和の時代は18年間続きますが、これは良房にとっての黄金時代でした。

貞観8年(866)清和は勅を下して太政大臣良房に「天下の政を摂行」させます。それまで非公式に天皇の政治を代行してきた良房でしたが、ここで名実ともに摂政の役に就いたのでした。そして、872年に亡くなるまでその座を譲りませんでした。



③ 摂政藤原基経

良房の養子となった基経は852年に藏人として出仕して以来破格の出世を遂げ、良房の死の直前には右大臣に就任しています。良房のバックアップがあったとしても政治家としての実力が基経に備わっていたと言えるでしょう。この間、866年の応天門炎上に続いて、待賢門の火災、春宮庁院の火災、淳和院の火災、冷然院の火災が起こり、遂に876年4月には大極殿が焼け落ちました。清和は相次ぐ火災で大極殿の炎上に衝撃を受け、皇位を皇太子貞明親王に譲ります。清和に次いでこれまた9歳の天皇でした。この幼帝を陽成天皇と呼びます。清和は基経に対して詔を発し、天子の政を摂行すべしと命じています。良房が幼帝清和を摂行したのは文徳が若くして没したことが原因でしたが、基経の場合は清和が27歳という若さで退位した結果であり、この退位に基経が深く関わっていたことは間違いないところでしょう。

陽成は基経の妹高子のもとで養育されていたのですから、諸事について基経の意のままであり、基経の権力はいよいよ増大しました。このような策謀を採ったのには台頭してきた源氏に対する牽制の意味がありました。奈良時代からの有力諸氏は既にその力を削がれていましたが、天皇家をバックとして有能な人材を輩出している源氏に対して、付け入る隙を与えずに事を運んだのでした。そのためには天皇の詔が必要だったのです。こうして摂政基経の時代が始まります。

4. 百済王家から三松家へ

(1) 百済王家ゆかりの人

北家の興隆に比べて傍系へと没落していった南家に一つの大きな星が現れました。官位としては参議であり、台閣の中樞に登り詰めたとは言えないのですが、宇多天皇のもとにあってその政治改革の中心として参画した藤原保則は、南家の名声を一時期ながら大いに高めました。保則は百済王明信の曾孫に当たります。

① 南家藤原保則の善政

冬嗣・良房は藤原北家の隆昌のためには権勢と智慧をもって大活躍をしましたが、国政についてはあまり関心を持たなかったのではないのでしょうか。国司に任命された貴族は現地に赴かず、郡司や豪族が好き勝手に権力を行使し汚職が耐えない状況でした。地方に赴いた国司は受領と呼ばれるようになりますが、その受領たちも勝手な重税を掛けたりして搾取を行い、百姓たちを苦しめていました。このような中で、備中・備後で受領として活躍した藤原保則は善政を行って人々の人望を集め、国政の中の良心的な高官から大きな支持を得ていました。保則は南家の中納言藤原乙叡の孫ですから百済王明信の曾孫です。乙叡は吉子の変によって台閣から追放され、南家は政治の中樞か

ら遠く離れたところにありました。父の貞雄の官職も左兵衛佐という高くない地位で終わっています。保則は855年文徳の時代に治部少丞として官界に入りました。受領を経験した後、左中弁に任じられます。

878年、出羽国の蝦夷の反乱に際して保則は、基経から出羽権守に任じられてその討伐に当たります。出羽の蝦夷も秋田城守らの圧政に苦しみ、それに対する抗議行動でした。基経は民衆から人望を集めた保則の政策を、対蝦夷にも利用出来ないかと考えたのでしょう。保則は現地の状況を見定めて寛大な政策を実行します。先ず蝦夷に対する軍備を怠りなく行うと共に、雄勝・平鹿・山本の3郡の政府備蓄米を、郡内の俘囚に支給し彼らを懐柔させました。この施策は功を奏して各地の蝦夷が次々に降伏してきます。朝廷は蝦夷に対する軍事的な討伐行動を求めますが、保則は兵の常備は必要であるが、今とるべき策は凶作と騒動で疲弊した民衆に寛大な対応をすることであると進言します。基経はこれを受け入れ蝦夷討伐の軍を撤退されました。こうして蝦夷の反乱は武力を用いることなく終息したのでした。

保則はその後伊予守や太宰大貳に任じられ従四位上となりますが、宇多天皇は保則の力量を高く評価して、891年には左大弁、次いで参議、民部卿に任じられます。因みに菅原道真は保則から1年遅れて参議に昇進しています。宇多は清和・陽成と続いた摂政政治を脱却して親政を推進しようとしたのですが、その頼りとしたのが保則と道真でした。「寛平の治」と呼ばれている宇多の行政改革は、良房・基経と続いた政治のマンネリを打破し、崩れかかっている律令制度の立て直しを図ったものでしたが、その推進勢力となったのが保則と道真でした。保則は寛平7年(895)に薨じましたが、死の直前に比叡山に入り念仏を唱えながら亡くなったと言われます。優れた人格と才覚によって台閣へ入った保則は、南家の存在感を示した最後の人材だったのでした。狡猾な策略を弄ぶ北家に比べて、南家藤原保則の高潔な精神と行動は高く評価されるべきものでした。



② 源多と源光

源多(マサル)と源光とは仁明を父とし、その後宮に入った百済王豊俊の女を母としていて、台閣に登場する人物です。母の名前が正史に伝えられていませんが、宝持と言われていたようです。豊俊は氏姓を百済王から三松に変えています。娘の名が伝わらなかったのはそのためでしょうか。しかし氏族の名は伝わっていても名前の分からない女性が多くいます。女性の人権が認められていなかった時代の所為と言うべきでしょう。

878年に藤原保則が出羽権守に任じられて出羽の蝦夷を討伐するよう命じられた前後には、蝦夷が秋田城に大挙して襲いかかり、文室有房らが奮戦しますが撃ち破られて、城中に甲冑300領、糒700石、寝具1,000条、馬1,500匹などを奪われてしまいました。この時大納言兼左近衛大将で陸奥出羽按察使であったのが源多でした。源多はこの敗戦の責任を感じて按察使の解任を願い出ますが許されませんでした。仁明の皇子として台閣で重きを成していたのでした。源多は右大臣まで昇進します。

宇多が親政を実行しようとして保則や道真を参議に登用した時の台閣の主要メンバーは次のようでした。

- ・左大臣 源融 (72歳)
- ・右大臣 藤原良世 (72歳)

- ・大納言 源能有 (50歳)
- ・中納言 源光 (48歳)
- 同 藤原諸葛 (68歳)
- 同 藤原時平 (23歳)

中納言源光が宇多の政治にどのような貢献をしたかは定かではありませんが、光もまた多と同様に右大臣まで昇進します。

(2) 薄れゆく百済王

百済王家がだんだんと色あせていく過程を、藤原北家の台頭する歴史の中で源氏が勢力を伸ばし、百済王氏はじめ多くの名家が没落していく様子を見てきました。百済王家衰退の理由をまとめておきたいと思います。

① 百済王家没落の理由

第1に、やはり藤原内麻呂の存在を挙げざるを得ないでしょう。それは飛鳥戸造氏の存在につながります。内麻呂の妻として真夏・冬嗣の兄弟を生んだ飛鳥戸奈止麻呂の女永継は、桓武の後宮に女嬬として入って桓武の子永岑安世を生んでいます。従七位下という低い身分に留め置かれました。これは後宮で実権を持っていた百済王明信の差配によるものではないかと推測されます。内麻呂は太政大臣となり、良房もまた清和の摂政まで登り詰めますから、後宮での永継の身分の低さには我慢がならなかったでしょう。それは百済王家に対抗するように飛鳥戸造を百済宿禰とするなどの行為に表れています。また、その報復的な姿勢は伊予親王の変での内麻呂の態度に表れました。台閣のトップにあった右大臣藤原内麻呂は明信の子中納言藤原乙叡の無実を擁護することなく、南家が没落するのを冷ややかに見つめていました。

第2には、平城天皇との対立です。平城は妃の母薬子に惑わされて春宮に入れますが、桓武はこれを嫌って薬子を遠ざけます。平城の矢面に立ったのは明信だったようです。明信は尚侍として百済王家の女性を桓武や嵯峨の後宮に送り込んでいますが、平城には一人として送っていません。桓武の意向を帯びて平城と対立した明信は、平城に対して差別的な行動を取りました。平城は伊予親王の変を利用して、かねてより不快感を抱いていた乙叡を体よく退けました。

第3に、嵯峨や仁明の多くの親王らが臣籍降下して源姓を名乗ったということがあります。いろいろな氏族の女性たちの生んだ親王らが、源という一つの姓の中にまとめられたのです。諸氏族を超越して一つになりました。これまでは諸氏族の中の選ばれた男性が地位を得て台閣に進出しましたが、天皇の息の掛かった源氏がこれに取って代わりました。藤原家と源家以外に政治の中枢に昇っていくことは諸家にとって殆ど不可能となってしまったのでした。即ち、諸家の地位の絶対的な低下を招く結果となりました。百済王氏にとっても例外ではありませんでした。

第4に、藤原良房の天皇外戚への執念を挙げることが出来ます。桓武は百済王家を外戚であると詔しましたが、良房は藤原北家を外戚にすべく強引な手段を用いました。妹順子を仁明に、娘明子を文徳に、そして姪高子を幼い清和にめあわせるという執念をもって強力な外戚関係を築き上げたのでした。天皇の意思を無視してまでも進められて、文徳の第1皇子惟喬親王は母の出自が紀氏であるが故に、皇太子の座を得ることが出来ませんでした。良房は、他氏族の女が生んだ親王の立太子を徹底的に排除したのです。

第5には、時代の流れがありました。半島においては新羅による統一が行われてからは、わが国との交流が停滞しました。渤海国が新羅と対立していて、その渤海使節を受け入れていましたが、朝廷の関心はむしろ中国を向いていました。遣唐使の派遣が終わると中国の文化に大きく依存しながらもわが国独自の文化が発展します。半島に存在しなくなった百済という名はだんだんと過去のものとなりましたし、百済王の名も違和感を感じるものになってきました。そして、改姓を考えざ

るを得ないところまで来たのです。

② 三松家へ

最早、持統天皇から受けた「百済王」という氏姓が違和感あるものとなり、豊俊は姓を「三松」と変えました。豊俊の邸宅にあった3本の松の木に因んで付けられたと言います。

しかし、改姓はそんなに単純なものだったのでしょうか。改姓をせざるを得なくなった豊俊の心境は複雑だったでしょう。悩んだあげくに採用したのが三松だったとすればもっと大事な理由があった気がします。勝手な想像ですが豊俊は次のように考えたのではないのでしょうか。

倭国はかつて半島の伽耶の地に「任那」を経営していました。任那の意味するところは、先祖の国ということではないでしょうか。天孫降臨の話の中に、「すめみま」という言葉があつて、「みま」は子孫を意味するようですが、先祖と子孫は系列的につながっていて「みま」は先祖も子孫も表す言葉ではなかったのでしょうか。三松は実は任（ミマ）の津でした。唐津が加羅の津、小松が高麗の津であるように、三松は任の津だったと想像できます。豊俊は名誉ある一族の拠り所としての「任津」を姓としたのでしょうか。それを分かり易く書いたのが三松でした。百済王の無念と一族の結束を訴えた氏姓が三松ではなかったかと考えます。

「百済と百済王」を締めくくるに当たって勝手な想像をしましたが、百済の滅亡を語り百済王の衰退を語ってきた最後に、孫である源多・源光の活躍を祈りながら、そして一族の再びの繁栄を願いながら改姓に当たったであろう豊俊に思いを馳せつつ、この講座を終わりたいと思います。

(付) 百済王凋落についての一考察 (三松みよ子氏)

藤原北家の興隆のあとを辿ることによって、南家の衰退と運命を共にした百済王家を眺めてきました。平安朝初期の時代の流れに対応出来なかった百済王氏は、衰退せざるを得ない運命にあったと言えるでしょう。百済王家末裔に当たる三松みよ子氏は、藤原北家などによる百済王家疎外という観点から百済王家衰退に関する論文を書いておられます。私が触れなかった点についての記述もあり、参考になるところが多いと思いますのでここに転載させて頂きました。なお紙面の都合で勝手ながら一部を省略させて頂きましたのでご了承頂きたいと思います。

なお、この論文は「藤沢一夫先生卒寿記念論文集」に掲載されたものです。

【百済王氏凋落についての一考察】

・はじめに
(省略)

1. 百済王氏疎外と排斥

(1) 鎮守将軍百済王俊哲の左遷
(省略)

(2) 平城朝における百済王氏疎外

大同元年(806)3月桓武天皇が薨ぜられ、平城朝となると公卿構成は一変した。桓武朝の重臣であった中納言和家麻呂、大納言壺志濃王、右大臣神王は相次いで薨じ、正三位の藤原雄友、従三位の藤原内麻呂の上席には誰もいない状態になった。

大同元年5月18日即位した平城天皇は、内麻呂を正三位に、翌19日には雄友を越え右大臣に任じ、上位公卿構成は次ようになった。

- ・右大臣正三位 藤原朝臣内麻呂（北家）
- ・大納言正三位 藤原朝臣雄友（南家）
- ・中納言従三位 藤原朝臣乙叡（南家）

内麻呂は百済宿禰永継との間に生まれた長男真夏を平城天皇側近に入れ、またこの頃、大同2年4月、大同3年2月の二度にわたり、平城朝においては数少ない奉獻を行うなど短期間のうちに天皇の懐深くに入り込みその親密さがうかがわれる。

大同2年10月伊予親王事件が起き、平城天皇の異母兄弟にあたる伊予親王が謀反を企てたとして捕らえられ、11月親王は毒を仰ぎ亡くなった。

伊予親王は、南家藤原是公の女吉子所生の親王であり、大納言雄友は叔父にあたる。桓武天皇遊獵巡幸の際には、尊皇の第や荘への行幸の記録が「日本紀略」に数多く記され天皇の鍾愛の深さがみられる。

この事件により藤原雄友、藤原乙叡、橘安麻呂、橘永継などと連座させられ、雄友は伊予国へ配流、乙叡はかつて平城天皇が皇太子の時、宴席で不敬な振舞があったとして憎まれ、無実にも関わらず解官となる。乙叡は桓武天皇の寵臣であった右大臣藤原繼縄を父に、桓武後宮の尚侍として権勢をふるった百済王明信を母に持ち、父母の縁により桓武天皇の寵愛を受けたと言われている。しかし、その父も延暦15年に没し、母も桓武天皇崩御後に尚侍を辞任しており、強力な後ろ盾を失っていた。南家の雄友、乙叡の失脚により北家内麻呂の権力体制が始まったといえる。

大同3年、南家の凋落が決定的となり、明信の縁で深く結ばれていた百済王氏に陰を落とす理不尽ともいえる出来事が続いた。それは、大田親王の不自然な死と百済王教俊の譴責である。桓武天皇皇子で、百済王氏にとって初所生の親王である大田親王が16歳の若さで薨ぜられた。延暦9年2月詔「百済王等者朕之外戚也」、16年5月勅「亘百済王等課并雜徭。永從鬪除。」の二つの詔勅は、桓武天皇の百済王氏に対する深い思いのあらわれであった。その象徴ともいえる親王の成長は一族の願いであり、喜びはいかばかりであったであろう。親王の成長は大きな期待の中で大切に育んできたものと思われる。

大田親王に関する記述は「日本後紀」の欠巻と重なり極めて少ない。（以下一部中略）

大田親王の生年は逆算すると延暦12年（793）となり、この年、百済王氏の氏寺である百済寺に特別な施入がみられる。百済寺への施入は延暦2年、17年にもみえるが、「錢30万特施入」と記されているのはこの年だけであり、大田親王誕生による桓武天皇の特別施入と思われる。

また親王は延暦16年、18年に田を賜っており、特に18年の「摂津職田荒田57町」は、年長の伊予親王53町、仲野親王50町に比べても破格の扱いといえる。

このように鍾愛をうけた大田親王の加冠の記述は、正史に見当たらない。

しかし、同年生まれの坂本親王の加冠が、「日本後紀」延暦24年11月23日条にみえ、また、堅い系図「百済王裔三松氏系図」において、大田親王の母とされている百済王教法に田を賜った記述があり、さらに、桓武天皇と百済王氏の関係から加冠が行われなければならないはずはなく、この頃、大田親王の加冠があったものと思われる。

いずれにしても、百済王氏の期待の星であった大田親王の死が、病死であったのか、その他であったのか不明であるが、百済王氏に起きた大きな悲劇は、伊予親王事件にことよせた南家排斥の直後だけにきな臭さを感じずにはいられない。

さらに、百済王氏にとって理不尽ともいえる事件が起きた。

大田親王薨去の3ヶ月後、鎮守將軍兼陸奥介であった百済王教俊が、任命からわずか一ヶ月足らずで平城天皇の勅による譴責を受けた。

（以下一部省略）

教俊は、百済王氏の中でとりわけ突出した存在であった。

前の鎮守将軍で何かの事件に連座したとして、日向介に左遷された俊哲は父であり、尚侍明信は伯母にして、藤原乙叡は従兄弟になる。また、大田親王を生んだ女御教法、嵯峨天皇との間に基良親王、忠良親王、基子内親王を生んだ女御貴命は兄妹にして、嵯峨天皇との間に源定、源鎮、源善姫、源若姫を生んだ尚侍慶命と仁明天皇との間に高子内親王を生んだ永慶は女である。

桓武天皇の寵遇を得た百済王氏の繁栄と明信の後宮での権勢は、平城朝において、天皇の反感、北家内麻呂の反感と危惧を増幅し、この平城朝から本格的な百済王氏疎外が始まったといえる。

(3) 非参議のままの百済王勝義

「公卿補任」には、百済王勝義が承和6年(839)から寛和2年(855)までの15年間、非参議として記されている。

この間、同じく非参議であった平高棟、源融はほどなく参議に任じられている。紀百継は弘仁13年(822)より非参議であったが11年後には従二位となり、翌年には参議に任じられている。また、藤原継業は15年間非参議のままであったが、継業は藤原緒嗣の弟であることから、参議への昇進がなかった理由について百済王勝義と同列には語れない。

過去、百済王南典が21年間、百済王敬福が17年間、また、高麗朝臣福臣が24年間いずれも寛和まで非参議であった。しかしながら、渡来系の氏族が執政の地位に就かないことになっていたことは、和朝臣家麻呂の「蕃人相府に入ることをこれより始まる」で既に崩れており、その後、菅野真道、坂上田村麻呂は参議に任じられている。(中略)

ここに、百済王勝義が61歳から76歳まで非参議のまま据え置かれ、参議への昇進を妨げられたことは、まさに、百済王氏疎外の一例といえる。

(4) 薨卒記事にみる百済王氏疎外

(省略)

(5) 隠された源多、源光の母は百済王豊俊の娘

正史に無いからとして、その人物の存在を否定することをはばかれる女性がいる。

仁明天皇の皇子源多、源光の母である。いかなる正史を探したところで、この二人の母の名前や出自は全く記されておらず、源多も源光も共に右大臣を務めた程の権力者である。そのような人物の母の名や出自が不明とは、いかにも奇異と言わなければならない。

「三代実録」「公卿補任」「日本紀略」「帝王編年記」等における二人の薨卒記事においても、内容は極めて簡略であり、時平と比較しても異常なほど用件のみに終始している。「尊卑分脈」において、やっと「母、新勅作者」とのみ記述がみられるが、管見の限りどこにもそれらしき名前は見当たらず、まさに謎である。本来ならば、ここまで伏せる必要はなく意図的に隠したものと思われる。なぜなら、源多、源光の母は、譴責を受けた百済王教俊の子百済王豊俊の女である。

堅系図「百済王裔三松氏系譜」においては、豊俊の代から直系のみの系図となっており、傍系は省略されているが、横系図「百済王三松氏系譜」においては、兄弟の記述が残されている。

金昌沫著「博士王仁—日本に植えた韓国文化」の中で、豊俊の女の名前を「宝持」と記されている。今、「宝持」の出典を明らかにすることはできないが、おそらく根拠があつてのことだと思ふ。(以下省略)

2. 百済王氏の凋落の要因

さまざまな百済王氏疎外がみられ、百済王氏の名が徐々に正史から消えていく貞観から元慶に掛けて百済王氏凋落の要因と考えられる三つの事象があつた。

(1) 北家藤原冬嗣の外戚浮揚

衰退していく百済王氏と対称的に、この頃、頻繁に正史に登場し、急浮上してくる百済系渡来氏族がいる。

藤原北家内麻呂の妻（正室は坂上刈田麻呂の女登子）で冬嗣、真夏を生み、後に桓武天皇の女嬬となり良峯安世を生んだ百済宿禰永継の実家、飛鳥戸造一族である。

これまで、飛鳥戸造一族の正史への登場は数える程しかなかったものが、冬嗣、子良房の特進の昇任に合わずかのごこく一挙に増え、まさに、外戚登用は冬嗣に始まり良房で全盛を迎える。このことは、飛鳥戸造一族の年表に冬嗣、良房の昇進を織り込むことでより明白になる。

飛鳥戸造一族の改賜姓は複雑をきわめ、最終的に御春朝臣で落ち着くまでに、三通りの賜姓がおこなわれたもの考えられる。

- ・飛鳥戸造→百済宿禰→御春朝臣
- ・飛鳥戸造→御春宿禰→御春朝臣
- ・飛鳥戸造→御春朝臣

飛鳥戸造一族は、百済国20代比有王の子昆支王の子孫との氏族伝承を持ち、河内国安宿郡（現、羽曳野市）を本拠にしていた。藤原冬嗣の母は百済安宿公奈止麻呂の女であり、飛鳥戸造一族は冬嗣の外戚にあたる。複雑な改賜姓を繰り返すたびに、改姓理由に「百済王孫」をことさら強調するなど他に類を見ない特異な改賜姓といえる。

弘仁3年（812）冬嗣が参議になった当初は、改姓理由は「百済王孫」どころか全く記されていない。しかしながら、承和6年（839）「百済王の種」となり、貞観4年（862）～6年「百済国昆支王之後」「百済国人昆支也」「百済国人比有之後也」「其先出百済国人比有也」等々百済王氏を意識し、牽制した改姓理由がみられる。

「新撰姓氏録」には飛鳥戸造氏のように、氏祖を百済王孫とする氏族が数多く見られるが、真に百済王孫として位置づけられているのは百済王氏だけであった。また、多くの渡来系氏族が競って日本的な氏姓を求め変化していく中で、百済王氏は唯一、百済王族としての証・氏名を変えずに「百済王」として存続しえたのは、自他共に認める百済国王族としての誇り以外の何ものでもなかった。

しかし、「百済王は百済王氏のみに非ず」とする冬嗣の強い思いは外戚登用となり、さらに、百済王疎外は良房へ引き継がれたものと考えられる。

一族の氏神である飛鳥戸神社は、良房が摂政となった天安2年（856）の翌年、無位から正四位下が授けられ、翌々年には官社へと格上げがなされている。また、元敬4年（880）氏人の百済宿禰有雄、御春朝臣有世らの請により春秋の祭祀をまかなう神田を1町賜っている。

さらに、氏神の飛鳥戸神社のみならず、百済王氏の本拠である河内国交野の三ノ宮、二ノ宮、一ノ宮の各神社においても、百済宿禰の請によりそれぞれ3千歩の神田を春秋の祭祀をまかなうために賜っている記録が「枚方市史」にみえる。

同時期、堅系図「百済王裔三松氏系譜」の添書の中に、百済王氏の霊祠廟に春秋の祭祀をまかなう若干の地を賜っていたことがみられるが、百済渡来氏族の宗家である百済王氏の地位低下は、このようなところにもあらわれており、百済王氏が元慶3年（879）を最後に正史から消え去ることを考えあわせると、百済王氏の衰退と飛鳥戸造一族の繁栄の構図が奇しくも符合する。

承和7年（840）、貞官10年（866）、仁和2年（886）に見られる御春朝臣による鎮守將軍の輩出は、まさに、かつての百済王氏そのものといえよう。

(2) 後宮に入った百済王氏の女性たちと皇子皇女の誕生

朝堂（議政官）に氏の代表を持てなかった百済王氏が、桓武、嵯峨、仁明朝において繁栄をみた要因の一つに、後宮に入った百済王氏の女性たちの存在が大きな役割を果たしたといえる。

この時期、尚侍としての百済王明信は百済王氏にとって、まさに、氏の長たる存在であった。明

信は「延暦十六年正月能登国羽咋・能登二郡没官田並びに野77町」を賜るなど、桓武天皇の絶大なる信頼を得、尚侍として権勢をふるうと同時に一族の多くの女性の後宮入りに深く関与し、これらの女性の中から、桓武、嵯峨、仁明各天皇の皇子、皇女の誕生をみる。(中略)

百済王氏初の親王であった大田親王は、前述のとおり16歳で薨ぜられたが、桓武天皇との間に百済王貞香が駿河内親王を、嵯峨天皇との間に百済王貴命が基良親王・忠良親王・基子内親王を、また、百済王慶命が源貞・源鎮・源善姫を、さらに、仁明天皇との間に百済王豊俊の女が源多・源光を、百済王永慶が高子内親王を生んでいる。

これらの皇子の誕生から元服を迫ることにより、百済王氏疎外に関連したいくつかの事柄が見えてくる。

嵯峨天皇は、父桓武天皇と同様に交野への遊獵行幸を好まれ、弘仁3年から13年までは毎年行幸されるなどその数14回にのぼる。このような中、百済寺への綿の施入が弘仁5年、7年・8年とみられ、7年には百済王教徳、百済王勝義に昇叙を賜るなど桓武朝交野行幸再来を思わせる。しかし、施入が百済寺一寺だけでなく佐為、粟倉、百済寺が対象となっているところに大きな大きな違いがみられる。

天長7年(830)11月、百済王氏を母に持つ6人の皇子の中で一番早く元服をむかえたのは、基良親王である。百済王氏にとって大田親王元服以来の晴れやかな儀式であったものと思われる。

翌、天長8年(831)2月、源定が17歳で元服を迎え、百済王氏も奉獻するなど盛大な儀式であったことが記されている。弘仁6年、源定は嵯峨天皇の皇子として生まれ、天皇行幸時には百済王氏の奉獻もみえる。幼時淳和天皇の猶子となり鍾愛を受け「世に定は二父母あり」といわれる。元服の翌年に無位から従三位、天長10年には19歳にして前例のない参議となる。

源定の盛大な元服の儀で明けた天長8年の百済王氏にとって、この年、また皇子が誕生する。百済王豊俊の女を母に持つ仁明天皇皇子源多である。多の誕生により百済王氏は桓武、嵯峨、仁明と3代の天皇にわたり外戚となった。若くして大田親王をなくして以来、皇子の誕生は百済王氏の悲願であったに違いない。

ところがこの年、慶賀続きの喜びに包まれていた百済王氏に暗い陰を落とす二つの出来事があった。基子内親王と基良親王の兄妹二人が相次いで薨ぜられ、しかも、基良親王は元服をすませたばかりで無品であった。こうもあつげなく亡くなるものであろうか。元服をすませたばかりの親王の死は、先の大田親王の死と酷似しており偶然の一致とはおもえない。

承和元年(834)2月、忠良親王が16歳で元服を迎え、兄基良親王にはなかった即叙がおこなわれ四品に叙されている。

承和2年(835)2月、源鎮の直叙があり従四位に叙せられている。

鎮は嵯峨天皇の皇子にして、母は百済王慶命、兄は源定。元服の記述はみられぬが先例からして直叙の前に元服は行われたものと思われる。

承和4年7月、鎮は突然出家する。「神護寺へ登り剃髪入道、白雲禅師となる。城中聞く者これが為に涙を落とした」と記され、出家せざるをえなかった理由は不明であるが、百済王氏の血を引く親王の成長を阻止する大きな力が働いたものと思われる。

何故なら、百済王氏を母に持つ大田親王、基良親王も薨ぜられたのは元服の直後である。盛大な忠良親王の加冠の儀、また、承和3年8月源鎮の母百済王慶命が尚侍に任ぜられるなど百済王氏にとって慶事が続いており、鎮の身に何らかの災いが降りかかり、大田親王、基良親王の二の舞になる恐れがあったものと考えられる。出家は身を守るためであったと思われ、決して性格の脆弱さからの厭世ではないと推測する。

承和12年(845)仁明天皇皇子源光が誕生する。光は百済王氏にとって最後の皇子となった。以後、この4人の皇子は朝堂において活躍し、源定は大納言、忠良親王は二品式部卿、源多は右大臣、源光もまた右大臣で薨ずる。

後宮に多くの女性を排出した百済王氏も賀祥2年(849)尚侍百済王慶命が亡くなると、後宮への道も閉ざされた。わずかに、貞観元年(859)11月、百済王香春が無位から従五位下を賜った後宮記事がみえるものの、生後9ヶ月の惟仁親王を強引に皇太子に立てた良房の前に、もはや繁栄を望むべくもなく清和朝に入り百済王氏の名は正史から激減した。

貞観6年(864)10月の百済王俊聡から元慶3年(879)11月の百済王教隆まで実に15年の空白があり、ここに百済王氏は正史から姿を消す。

(3) 惟喬親王と百済王氏の親交

惟喬親王は文徳天皇の第1皇子として生まれながら、母が紀氏出身であったために皇太子になることができず、外戚として実権を握った藤原良房が惟喬親王を望む文徳天皇の意に反し、強引に女明子所生の生後9ヶ月の第4皇子惟仁親王を皇太子に立てた。立太子争いに敗れた惟喬親王は、交野の別荘渚院を訪れ縁戚関係にあった在原業平、紀有常と遊猟や饗宴で憂さを晴らしたと言われている。渚院は百済王氏の本拠交野にあり、百済王氏の居館はその近くにあった。

これまで、惟喬親王と百済王氏の親交を書き記したものは、管見の限り他に見当たらず、唯一、枚方の三松俊明が明治4年8月に役所に提出した「古器旧物御取調書上帳」の写しに見ることができる。

1 古弓 一張 鏃 弍

右 確認無御座候得共、遠祖百済王俊聡惟喬親王 交野御狩之時世、以弓矢供奉仕候由伝候

百済王氏の末裔三松家に伝わる宝物の中には、他に入朝のときに賜ったとする銅鈴、鉄鈴、交野行宮の瓦、百済王辰爾の木像など百済王氏の出自に関する品々が代々申し伝えられてきたという。

これまで、交野での遊猟は桓武、嵯峨天皇も頻繁に行われており、百済王氏にとって遊猟に供奉したのは惟喬親王が初めてではないことは歴然としている。しかしながら、三松家の宝物とされる品々の中に惟喬親王遊猟時に供奉した弓矢が存在することは、百済王氏にとって重要な意味を含んでいる。つまり、百済王氏は、この立太子争いに巻き込まれたことを示唆しており、極端なまでに反北家藤原氏とみなされたものと思われる。

・おわりに
(省略)

以上



百済風の石塔寺の塔